

本を選ぶ

NO.443 2022年(令和4年)4月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL:03-6908-4643

●<ろん・ぼわん>乳香再

●大学教員ノート 第7回

●幼稚園教育の歴史を紹介する企画展示を見て

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

乳香再

池澤夏樹の新聞連載小説がきっかけで聖書に登場する乳香や没薬もつやくが気になって、樹木や草木が生成する樹脂などから抽出される香気成分（精油）を深追いしてしまった。池澤の連載が終わって、次の多和田葉子の「白鶴亮翹」はつかくりょうしも毎朝なんとなく読んでしまう。タイトルからして太極拳の話題が縦軸にあるようだが、今のところ大きな展開はない。ちまちまとした人物描写やたくみな比喻表現に引き込まれる。中国の人が多く住む近所の団地で太極拳らしき所作を見掛けたりすると、連載の続きが気になる。

その団地に隣接していた大きな製紙工場跡地が再開発されて、数棟の集合住宅が建った。工場の時代からすでに大きく育っていた桜並木が立派なマンション群を取り囲んでいる。この春も見事な桜トンネルが近隣の人を呼んで賑わっていた。その桜並木の端っこには1本だけ楠くすのきの大木が陣取る。葉桜になるのを見計らったように、高所作業車が来てが拵がりすぎた枝を剪定している。住棟のベランダに配慮して管理しているらしい。

年配の人なら虫除けの木として、また樟脳しょうのうが楠から産出される防虫成分が原料だと知っている。もっとも今の時代は樟脳ではなく、次に登場した化学合

成のナフタリンも、無臭の防虫剤に取って代わられた。匂いが強く衣服にしみついて消えにくいからだ。筆筒にはゴンの時代だが、しかし、天然樟脳は健在である。今もわずかではあるけれど製造が続いているのだ。

無印良品は天然樟脳から抽出した精油を販売している。和製のエッセンシャルオイルだ。防虫効果だけでなく、リフレッシュ効果が期待できるアロマオイルとして活用できるらしい。楠の有用性はかつてはカンフル剤や強心剤の原料としても名をとどめているし、血行促進や鎮痛・消炎・鎮痒作用などの効能から外用医薬品の成分にも採用されてきた。また意外なところでは、初の人工の樹脂であるセルロイド製造の際の可塑性として不可欠だったようだ。セルロイドは可燃性が高く危険物に指定されているので扱いつらいが、おしゃれなメガネのフレーム材として復活し、人気があるみたいだ。

楠は材料としても多く用いられた。代表的なのは飛鳥時代の仏像で、ほぼ楠が使われていたようだ。材としては硬いので、その後は柔らかい檜が主流となったと言われるが、今でも木彫りの材料として売られている。通直な材になりにくく木目が複雑なため、家具材としては加工が難しく一般的ではないものの、仏像からの連想なのか高級仏壇や木魚として見掛けたりする。

桜並木の端の楠、と思い込んでいたが、このたび近くからしげしげ眺めたとてみ、スダジイであった。樹皮や樹形、遠目に見た葉叢など確かによく似ているとは言え、なんともきまりが悪い。(埜村 太郎)

大学教員ノート 第7回

ー現場力ー

石川 敬史

石川君、いいかい。自分の仕事だけを見るのではなく、全体の仕事の中で自分の仕事の位置づけをみることだよ。図書館の中で今の自分の仕事、大学の中で今の自分の仕事だよ。いいかい。

忘れられないコトバである。新宿西口駅の前の理工系大学に勤務する初日、図書館3階の閲覧座席にて角刈りの親分、いや、図書館のA部長と初めて対面した。石川青年が大学院を修了し、若造で生意気に見えたのか、就職したばかりの青年へのエールなのか、今ではもう確認することはできない。

石川君、悪いな。

強面のガッツリした体格からは全く似合わない、高音を発するA部長の口癖であった。サシで良くお誘いいただいたが、その手元には、季節に関係無く、常に甘口の熱燗だった。ちょうどこの当時、Webページの再設計、外国雑誌の紙媒体から電子ジャーナルへの移行など、新たな電子資料の導入と既存の図書館資料費との構造的な改革が迫られていた時代であった。電子資料導入の意義を大学や法人に対していかに説明するのかが問われていた。まさに図書館のイニシアチブである。大学の教育研究という役割全体の中で、石川青年は自分自身の仕事を見つめる日々を過ごし、A部長からは「社会人」としてのイロハを多方面に導いていただいた。

石川さん、今日は体調が悪いので、午後帰るね。ごめん。

1文のメールである。隣の席に座るB部長から。そう、二日酔いである。B部長とは退勤と同時刻の17時から長時間、立ち飲み屋にて長時間立ち続けた。17時5分に店の扉を開けると、「遅いぞ！」という第一声は忘れられない。アナウンサーのような落ち

着いた美声を発するB部長であるが、いつもなんだか落ち着きが無い。数回だったであろうか、スナックに行くと、B部長がステージに立ち続けていたことは今でも忘れならない。たいてい次の日には、このようなメールがしばしば届いた。

石川さん、判断できる資料をもってきて。もし〇〇だとすると、〇〇になるんだよね。でも〇〇だと、〇〇なんだよね。

新宿西口駅の前の大学に勤務した当初、B部長は就職課の部長として、近隣の大学でも知られた存在であった。いつかはこのような部長と一緒に仕事をしたいと思っていた。図書館システムのリプレイス、蔵書点検作業の外注、特別コレクションの美術館への出展など、さまざまな提案を受け入れてくれた。仮に大きな事業を提案しても、却下されたことは一度も無く、建設的に複数の選択肢を探り、長所や短所を共に検討した。1年や2年といった時間軸で仕事をするのがしだいに増え、出来事や進捗の景色を読み解くといった物事を洞察する重要性をB部長から導いていただいた。

石川さん、ちょっといいかな。

「ちょっと」というコトバ。C部長の口癖である。想定する時間は、だいたい5分や10分であろう。しかしC部長の「ちょっと」とは、たいていが2時間前後。甘いマスクから発せられる穏やかなコトバに吸い込まれてしまう。史上最大の戦慄する「ちょっと」は、ある年の仕事初めの1月、事務局長との打ち合わせである。その内容は、図書館の夜間業務委託の導入（その裏には課長補佐への昇格も含む）。今でも鮮明に記憶している。

石川さんさ、なんで遅れたと思う？ 2時間以上も。どうしてかな？ なぜかな？ 何で事前に連絡しなかったのだろうか。

私が遅刻したのではなく、業務委託会社の担当営業が打ち合わせ時刻に大遅刻した。そのときの

C部長のコトバである。「なぜ?」「どうして?」「なんで?」という問いかけは、「ちょっと」に次ぐC部長の口癖である。大手旅行代理店から大学職員へ転職し、情報システムに明るいC部長は「ちょっと」とサシで問いかけられることが多い。現在で言うところの「問い」をつくり、探究的な学び、といったところであろうか。自らの意識を筋道立ててしっかりとコトバで伝えること、同時に、長時間にわたり傾聴する中で自己との対話を続ける大切さをC部長に導いていただいた。

石川さん、被災地の方々を考えると、なんだか気持ちが落ち着かないね。

2011年3月12日、昼頃であったであろうか、JR埼京線で帰宅するD部長と混雑する車内での会話である。これから日本はどうなっていくのだろうか、いつもよりゆっくり走る車内では不安が渦巻いていた。前日、大学では帰宅困難者を受け入れ、緊急地震速報や余震が続く中、一夜を過ごした。新宿駅周辺の大混乱、そしてテレビから伝わる映像には絶句した。D部長は「相棒」(テレビ朝日)の杉下右京のように思慮深く、細かいことが気になる性格で、「冷静沈着」の4文字が似合っていた。細かく、厳しく、冷静さの裏側には、教養や学問に対する敬意があった。

えっ、石川さん、そうか。ん〜、やっぱりね。

新宿西口駅の前の大学を辞め、大学教員への道へ進むことをD部長に伝えた。物理学を専攻する当時の図書館長から押し寄せる大きな波から、静かに守ってくれたことを思い出す。カメラ・撮影にも詳しく、特別コレクションのデジタル化・資料整理に対するよき理解者であった。大学近隣の〇〇パシカメラで購入したカメラの小さな説明書を昼休みに真剣に楽しそうに読み込んでいた後ろ姿は忘れられない。他者の視線を忘れず、真面目に誠実に向き合う姿勢をD部長に導いていただいた。

* * *

大学図書館に勤務した十数年の間であったが、4

名の個性的な部長のもとで汗を流すことに恵まれた。自分らしく社会人として生きる土台を導いていただいたことには感謝に堪えない。もちろんスムーズに前へ進んだことばかりではない。時には意見の相違から議論が白熱し、数日会話をしない時もあった。時には拙速な仕事の方法を厳しく注意されたこともあった。時にはスタッフ間のトラブルの仲裁に同席することもあった。部長とはよく議論し、よく喧嘩し、よく提案し、よく勉強し、よく飲んだ。

現場における実践は、個人の熱意や能力だけではなし得ない場合が多い。現場とは、常に正しい答えを持たず、複数の対人関係が存在しつつも、資源や予算の乏しさと制度や政策の壁を工夫して乗り越える創造性を発揮できる空間である。両者が活かされ、組織内で互いを尊重し協働しながら育むことが豊かな実践につながるといえよう。

いったい「現場力」とは何であろうか。そして「現場」とは何か——うまく物事が進まず暗いトンネルの中で自分探しをしている時や、研修会で先導的な実践を聞いた帰路など、しばしば考えていたことである。そんな時、次の2冊の本に出会い、確か2007年頃だったであろうか、若造の石川さんが図書館関係の雑誌に記した拙文である。人と向き合う社会福祉の現場から、「現場」の意味と優位性を言及し、「現場」で働く人々を勇気づけていた論考(尾崎新編『「現場」のちから：社会福祉実践における現場とは何か』誠信書房／2002)と、学び成長することとは単なる知識の伝播と習得ではなく、「実践共同体」への参加を高めていく社会における学習の捉え方(J. レイヴ、E. ウェンガー／佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』産業図書／1993)から大いに刺激を受けた。部下を守り、組織を守り、同時に部下と組織を育む——彼らはどのように判断するであろうかと、大学教員になった現在でも、歩む道を迷っている時に思うことがしばしばある。まだまだ部長の身体性あふれる現場力から学ばなければならない。

(いしかわ たかし：十文字学園女子大学)

幼稚園教育の歴史を紹介する企画展示を見て

菅 修一

京都市学校歴史博物館で開催された企画展「京都における幼稚園のあゆみ～みんなのたのしいところはいつまでも～」(令和3年7月31日～令和4年1月31日)を見学しました。明治時代に始まった幼稚園での保育の歩み、教員の活動、戦時中のことなどを文書、写真、書籍、遊具現物等169点(展示替えあり)で語る展示でした。

1. 幼稚園の誕生

日本における幼稚園の始まりは、明治9年の東京女子高等師範学校附属幼稚園の開園とされていますが、京都では明治8年に柳池小学校の校舎の一隅に「幼稚遊嬉場」が開園しました。「幼稚遊嬉場概則」(明治8年12月)が展示されていました。この概則には、「課業を定めると子どもは倦怠感をもつので、出席・勤惰を問わないこと」等の記述がありました。子どもに何かを教え込もうとするのではない子ども本位の姿勢を垣間見るものでした。

2. 京都の保姆たちの研究活動

戦前、幼稚園の女性教員は「保姆」と呼ばれていました。京都市の保姆たちは、いまだ導入されたばかりの幼児教育をよりよく知るため、明治20年代から「京都市保育会」を組織し、講演・講習会を開催し、毎月1回研究会を開催していました。明治30年代からは「三市聯合保育会」(筆者注：三市は京都・大阪・神戸)が結成されます。聯合保育会では創作遊戯の研究に積極的だったそうです。この頃は幼児教育に適した遊戯が少なかったため、その拡充が喫緊の課題になっていました。展示では、京都市保育会の会則や幼稚園の日誌や写真から当時の保姆たちの研究活動を読み取っていました。また、京都市保育会は研究成果を保育細目(明治38年4月)にまとめています。京都市内の数多くの幼稚園がこの細目を参考に保育を行ったそうです。

3. 「談話」から「お話」へ

子どもたちが幼稚園で先生からお話を聞かせて

もらうことは、ごく普通のことだと思っていましたが、明治時代の幼稚園では「談話」が重んじられたそうです。「談話」では修身(現在の道徳)のような題材を取り上げて、幼児に道徳を教えようとした。しかし、当時の保姆は児童心理学の発達する中、道徳的な題材が幼児に適切か疑問に思うようになりました。その結果、幼児を楽しませる「お話」が導入されました。幼児にとって良いお話を選んだり作ったりしようとした保姆はより詳しく幼児を知ろうとさらに研究を重ねていったそうです。

4. いろいろな「はじまり」

幼稚園で楽器を幼児が使って音楽を楽しむようになるのは昭和のはじめになってからだそうです。その頃から海外の音楽に親しんだ先生が増えてきたようです。明治のはじめから唱歌の研究が行われましたが、当時は西洋音楽の知識を持つ人がほとんどいなくて楽譜は読めませんでした。雅楽にのせたメロディーが作られましたが、雅楽の緩やかなメロディーは子どもが生き生き伸び伸びと歌い踊れるものではありませんでした。

ブランコやシーソー、砂場といった幼稚園に設置される固定遊具の導入は明治30年代から注目され、大正時代には整備されるようになったそうです。

幼児が自由に絵を描くようになったのは、明治の終わりころから大正にかけてだそうです。子どもたちが自由に絵を描くには紙の上を滑らかに動かせるクレヨンが使われはじめたのです。欧米とのつながりのある京都のキリスト教系の幼稚園には明治の末からクレヨンが使われ、サクラ商会がクレヨンを製造したのは大正10年です。

5. 戦争と幼稚園

日中戦争が本格化する中、小学校などと比べると比較的自由だった幼稚園の保育も戦争という国家レベルの動きに一元化されていきました。昭和18年2月、保姆と幼児が教室で防空訓練をする写

真がありました。敵機襲来に備えて「伏せ」をできるようにすること、押し合わず片腕を取り合っ
て避難することなどの訓練だったとの説明がありました。

昭和 16 年 11 月に中国南部の戦場にいる兵士が京都市内の日彰幼稚園の 16 名の園児に宛てた手紙が展示されていました。手紙は、慰問画や慰問文を送ってくれた園児への礼状でした。「…リッパナニッポンノコドモニナツテクダサイ…」と書かれていましたが、宛名も本文も丁寧なカタカナ文字で書かれていました。戦争の緊張を暫し忘れ、幼子を愛おしむ思いから書かれたのでしょうか。

謝辞

以上、展示を担当された同館の林潤平学芸員のお話とキャプション説明に拠りました。筆者も受けた幼稚園教育が、明治以来の幼稚園教育の歩みの中で形成されてきたことを知ることができました。感謝です。

(すが しゅういち：花園大学)

京都市学校歴史博物館

京都市下京区御幸町通仏光寺下る
橘町 437

URL : <http://kyo-gakurehaku.jp/>

